

復活節 武蔵野日曜集会

復活の力

――ロマ書第8章9～11節、列王記略上下他――

1987年4月19日(武蔵野)

小池辰雄

エノクおらずなりき エリヤ大風にのりて天に昇れり 不尽の油 子の魂中にかえりて生きた
 り エリシヤの骨にふるるや生きかえれり キリストの甦りは極めて当然なこと 聖霊は来ざ
 るを得ない 召団讃歌「復活の力」 御霊なんじらの中に宿り給うがゆえに 熾んなる霊の生
 命の顕現

【ロマ8:9～11】

9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。
 キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。10 若しキリスト汝ら
 に在まざば^{からだ}体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。
 11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給
 わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿
 りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき^{からだ}体をも活し給わん。

●エノクおらずなりき

ご遠方からもよくいらつしやつてくださいました。1941年の春から今回まで復活節
 を47回やって、まだ語らないところがあるかと思うと、まずないわけです。ところが、今
 度はあつたんです。それで今日は未だかつてないお話になろうかと思ひます。

「復活」と言ひましたが、「甦えり」という言葉は私はあまり好きではない。まあ仕方がない、
 そう使っているものだから。「黄泉^{よみ}から帰る」なんていうのは。大体、黄泉になんかに行く
 必要は本当はないんだけど。

創世記1章27節に、

「人間は神の似姿に創造^{つく}られている」

という。「似姿」という訳もあまり感心しない。「神の相^{すがた}に即して」と訳すべきだと思ってい
 る。即ち、神さまは偶像でないですから、無相^{むさう}です。このことは『無の神学』にも書きま
 した。神さまの相は無相^{むさう}の相なんです。相無き相。この無相の相に即して造られたんだから、
 人間も本質は無相の相であるわけです。我々はみな相対的なかたちを持っていますけれど
 も、本当の姿は見えないんです。本当の姿が見えない、そこに本当の生命がある。だから、



神に即して造られた人間は、本当は死なないわけです。ところが、残念ながら、アダムのイブの物語にあるとおり樂園喪失になってしまった。そこで、死なざるをえないことになった。万人は死という宿命をみんな持っている。

ところが、この無相の相に即して生きたひとがある。それはご承知のとおりエノクです。創世記5章21節。復活をそんなところから語りだすというのは、私は今日が初めてです。

「²¹エノク六十五歳に及びてメトセラを生り。²²エノク、メトセラを生し後
三百年神とともに歩み男子女子を生り。

という。凄いね、これは。おもしろいね、365年生き長らえて、男子女子を生んだというのだから、大変なひとだ。

²³エノクの齢は都合三百六十五歳なりき。²⁴エノク神と偕に歩みしが神かれを
取りたまひければおらずなりき。」(創世記5・21～24)

と。これはまた大変な記事です。輝かしい記事です。「何歳にして死ねり、死ねり」ときんざん書いてあるなかで、ここだけは「死ねり」と書いてない。300年間神と共に歩んで、そして見えなくなってしまった。神さまはエノクを、死を経ずして連れていつてしまった。だから、ここは「居らずなりき」と書いてある。この「居らずなりき」という字が正に「無」という字なんです。無相の相になって、その通り行ってしまった。こういう極めて例外であるが、しかし、樂園喪失以後にも、本当に神と共に歩めば、死を見ずして行ってしまうという可能性を実現したわけです。

●エリヤ大風にのりて天に昇れり

もう一人いた。それは、ご承知のとおり、エリヤです。これは列王記略上から下にむかって書いてある。列王記略下の2章に、

「¹エホバ大風をもてエリヤを天に昇らしめんとしたもう時

ここに「大風をもてエリヤを天に昇らしめんとしたもう」とちゃんと書いてある。

エリヤはエリシヤとともに

ここに「エリシヤ」とあるが、これは「エリシヤ」です、ヘブライ語でも「エリシヤ」という。

ギルガルより出で往けり。

「ギルガル」というのは二か所ありますが、ヨルダンの流れの死海に注ぐちよつと手前にギルガルという所があります。

²エリヤ、エリシヤにいいけるは、請うここに止まれ、エホバわれをベテルに遣わしたもうなりと。エリシヤいいけるは、エホバは活く汝の靈魂は活く

この「エホバは活く汝の靈魂は活く」というのは誓いの言葉なんです。「これから言うことは、



絶対に私は自分の言葉に背かない」と言うときに、「エホバは活く汝の靈魂は活く」という言い方をする。

我なんじをはなれじと。

「どんなことがあつても、先生を離れません」と言つて、エリシヤはしがみつくわけです。

彼等ついにベテルに下れり。³ベテルに在る預言者の徒^{ともがら}

「預言者の徒」というのは、選びの預言者というのは必ず単独です。神さまから単独に選ばれる。そのまたお弟子さんたちがこの預言者の群になる。それが預言者の群ということです。

エリシヤの許に出でいたりて之にいいけるは、云々。」

と。要するに、エリシヤがどこまでもエリヤについて行きまして、そして7節、

⁷預言者の徒^{ともがら}五十人ゆきて遙^{はるか}に立ちて望めり。彼ら二人はヨルダンの浜^{ほとり}に立ちけるが、

ヨルダンの川辺に立つた。

⁸エリヤその外套^{うわぎ}をとりて之を巻き水をうちけるにこなたとかなたにわかれ
たれば、

水がちようと紅海みたいに分かれた。モーセの跡を継いだところのヨシュアがヨルダンを渡るときに、神の箱をかついで行つたら、水が分かれたと書いてあるでしょ。あれと同じような具合に。

二人は乾^{かわ}ける土の上をわたれり。⁹渉^{わた}りける時エリヤ、エリシヤにいいけるは、
我が取られてなんじを離るる前に汝わが汝になすべきことを求めよ。エリシヤいいけるは、なんじの靈の二つの分の我におらんことを願う。

靈の分けた二つを頂きたいと言う。実は彼は全部をもらつてしまった。「二つの分」というのは、分けかたのときに、昔は少し多いのと小さいのと分けたいらしい。

¹⁰エリヤいいけるは、汝難き事を求む。汝もしわが取られてなんじを離るるを

見ばこの事なんじにならん。しからずば此事なんじにならじ。

即ち、生きているうちは、ここに居るうちはダメだと、不思議なことを言つた。

¹¹彼ら進みながら語れる時、火の車と火の馬あらわれて二人を隔てたり。

エリヤは火の預言者ですから、バアルの預言者450人を相手に、神さまが火を下すことを祈つた。バアルの神に祈つたのは、さっぱり火が下りてこない。朝から晩まで祈つてもダメなんだ。疲れてしまつて。ところが、エリヤが祈つたらば、たちどころに神さまの火が下りてきて、薪を焼いたという。エリヤは勝つた。この「火の車と火の馬」とは要するに、火が車のような形をしたり、馬のような形をしたりして現れてきたわけです。

エリヤは大風にのりて天に昇れり。

竜巻みたいな風でしょう。上に向かつて行く。



12 エリシヤ見て、わが父わが父

キリストが神さまのことを「父」と言いましたが、このエリシヤはこの先生のことを「わが父」と言った。

イスラエルの兵車よその騎兵よと叫びしが、再びかれを見ざりき。」(列王記略下2:1～12)

ところが、エリシヤの弟子どもが、「いや、どこかに居るはずだ。捜させてくれ」なんて言った。「バカ言うな」と。けれども、あまり言うものですから、「では、捜してみろ」と言ったところが、ついに見つからなかったということがその後書いてある。結局、エリヤは天界に行ってしまった。

即ち、このエノクとエリヤは、死を見ずして天に往ってしまった。人間は本来、そのようなもの。いわんや、イエスが天界に行らっしゃれることはもう当然なことなんです。イエスは仕方がない。これは十字架という、贖罪という大業を果たさなければならなかったから。キリストが甦って必ず現れることは、今までの地上の姿よりもっと凄い姿になることは、キリストはちゃんと知っておられた。だから、預言された。ところが、ペテロまでも躓いてしまつて、へんだと思つた。まあ、そんなわけですよ。

● 不尽の油

ところが、エリヤという預言者が死人を甦らせた。そのことは列王記略上17章に出ている。エリヤはバアルの預言者たちと戦つて勝つたけれども、アハブの妃の、バアルをアハブに拝ませるようにしたイザベルが非常にエリヤを憎んで殺そうとした。それで、エリヤは逃げて行つた。

「『ギレアデに居住れるテシベ人エリヤ、アハブに言う吾事うるイスラエルの神は活くわが言なき時は数年雨露あらざるべしと。……』」

これはエリヤの預言のとおりになる。エリヤは鳥が運んでくる食べ物でもつて、水を飲んだりそのパンを食べたりして暮らしていたことがそこに書いてあります。ところで、

8 エホバの言彼に臨みて曰く、⁹ 起ちてシドンに属するザレパテに往きて其処に住め、

これはペリシテの方の所ですよ。「お前はアハブ王の勢力の中には危ないから、異邦に逃げていろ」というわけです。

視よ我彼処のやもめおんなに命じて爾を養わしむと。¹⁰ 彼起ちてザレパテに往けるが邑の門に至れる時、一人のやもめおんなの其処に薪を採うを見たり。すなわち之を呼びて曰けるは、請う器に少許の水を我に携来りて我に飲ませよと。¹¹ 彼之を携きたらんとて往ける時、エリヤ彼を呼びて言いけるは、請



う爾なんじの手に一口のパンを我に取りきたれと。

パンと水が欲しいわけだ。エリヤもすっかり断食を余儀なくされてしまっているからね。

¹²彼すこしいいけるは爾の神エホバは活く我はパン無し、ただ桶おけに一握ひとつかみの粉ぶんと瓶びんに少許すこしの油あるのみ。

少しの麦粉と油があるだけだと。

視よ我は二つの薪ひろを採う。我いりてわれとわが子のために調理ととのえて之をくらいて死なんとす。

もう飢え死しそうなところだと。ところが、神さまはこういう女の所にエリヤを遣わしたのは、エリヤをしてこの女を助けんがためだったんです。

¹³エリヤ彼に言う、懼おそるるなかれ往きて汝がいえる如くせよ。但し先ず其をもてわが為に小さきパン一つを作りて我に携もちきたりその後爾のためと爾の子のために作るべし。¹⁴そはエホバの雨を地の面おもてに降くだしたもう日まではその桶おけの粉は竭つきずその瓶びんの油は絶えずとイスラエルの神エホバ言いたまえばなりと。¹⁵彼ゆきてエリヤの言えるごとくなし、彼とその家及びエリヤ久しく食らえり。¹⁶エホバのエリヤに由りて言いたまいし言のごとく桶の粉は竭つきず瓶の油は絶えざりき。

という不思議なことが起きてきた。これはエリヤの神さまへの祈りによつて、雨がくだつてきたり、それが普通の物理現象でなくて、増えてしまった。それで助かったということが書いてある。これが「不尽の油」という、尽きない油という有名なお話です。カナの婚宴の時にキリストが水を葡萄酒に変えましたが、エリヤのこの奇蹟はまたちよつとそれに劣らないところの凄いことが起きているわけです。

●子の魂うち中にかえりて生きたり

¹⁷これらの事後、その家の主母あるじなる婦おんなの子疾やまいに罹かかりしがその病甚はなはだ劇はげくして氣息いきその中に絶えて無きに至れり。¹⁸婦エリヤに言いいけるは、神の人よ、もうこれは「神の人」と言うわけです。エリヤも「神の人よ」と言われています。なんぞ吾事わがことに關涉たずさわるべけんや。汝はわが罪を憶おもい出いださしめんため又わが子を死なしめんために我に來きたれるか。

と言つて、非常に懼れたわけだ。何かこの女は悪いことをしたかなんか知りませんが。¹⁹エリヤ彼に爾なんじの子を我に授せと言いて之をその懷より取り之を己の居る樓にかいに抱えのぼりて己の床に臥ふさしめ、²⁰エホバに呼ばわりていいけるは、吾神エホバよ爾はまた吾わがともに宿るやもめに災をくだしてその子を死なしめたもうやと。²¹而しかして三度身を伸ばしてその子の上に伏しエホバに呼ばわりて言う、



わが神エホバ願くはこの子の魂を中に帰らしめたまえと。

また中に帰らせて、これを甦らせてくださいと。魂がもぬけのからになっているから、また魂を入れてくださいと、非常におもしろいことが書いてあります。これが三度と。「三度」とか「七度」ということがよく出てきますが、これは本当にそういうようにするんでしょう。子の上に伏してする。同じようなことを今度はエリシャがやりますけれども。

²² エホバ、エリヤの声を聴きいれたまいしかば、その子の魂中にかえりて生

きたり。」(列王記略上17・1～²²)

とあるでしょ。即ち、甦りの復活の事実は既にエリヤが、それからまた後で見ますけれども、エリシャがやっている。そういう甦りの事実がもう既に、死から甦らせる事実が旧約において、預言者を通してエホバの力が働いてあったということは、やはり忘れることができないわけです。使徒たちも、キリストの直弟子たちも旧約のことを知っていれば、キリストの復活なんていうことはすぐ信じられたはずなだけども、まあ、そこが非常に愚かなわけです。

そういうことで、実は私はずっと旧約を読んでいるものだから、こういうことに今度は気がついた。もちろん、前に一遍やつたけれども、ちよつと忘れかけていたわけです。

●エリシャの骨にふるるや生きかえれり

今度は、エリシャの場合をみます。列王記略下の4章の始めのところに、

「少しの油しかなくて何も上げられない」

と言ったら、

「たくさん器を借りてこい。そして、その器に油を少しずつ注げ」

と言ったら、その油がすっかり満ちてしまったということが書いてある。エリヤの場合以上のことが出てくる。これはオリーブの油ですけれども、我々にとつても、聖霊が本当にくだつてくると、限りなく展開します。聖霊の油というものは人から人へとどんどん伝わっていきますからね。そういう意味においても、非常に大事な記事です。

それで、死人を生かしたことは、³²節あたりから、

「³² エリシャここにおいて家に入りて視るに子は死にておのれの臥床の上に臥してあれば、³³ すなわち入り戸をとじて二人内においてエホバに祈り、³⁴ 而してエリシャ上りて子の上に伏し己が口をその口におのが目をその目に己が手をその手の上にあて身をもてその子を掩しに子の身体ようやく温まり來たる。³⁵ かくしてエリシャかえり來て家の内に其処此処とあゆみおりまたのぼり身をもて子をおおいしに子七度噓して目をひらきしかば、云々」(列王記略下4・³²～³⁵)



と。そして、これは生き返ってしまった。そういう復活をエリシャもやっている。

それから、一番驚くべき記事は列王記略下13章20節からです。たくさんのカリスマ的な働きをしたエリシャが、

「²⁰エリシャ終に死にたればこれを葬りしが年の立ちへるに及びて

もう年が経つてですね。その当時の葬りは火葬ではないですよ、土葬ですからね。大体、白骨までなってしまうんだよな。

モアブの賊党国にいりきたれり。²¹時に一箇の人を葬らんとする者ありしが

賊党を見たればその人をエリシャの墓にお願いけるにその人いりてエリシ

ヤの骨にふるるや生きかえりて起あがれり。」(列王記略下13・20～21)

という。死んだエリシャが、白骨のエリシャが人を甦らせた。こないだこれを読んでいて、こんな驚くべきことは、私はもうおつたまげた。うっかりしてた。これは霊骨です。

「霊骨」という言葉は、佐久間象山が使つて、吉田松陰のことを「霊骨」と言った言葉がある。この霊骨というのは骨という意味ではなくて、吉田松陰のような人物を霊骨といって、本当に霊的な骨の人間だという意味です。ところが、この場合は骨が霊骨なんだ。そいつに触れたらば、死んだ人が甦ってしまった。エゼキエル書37章に骨がだんだん一緒にながつて、とうとう肉ができて、皮ができて、人に甦ったという霊的な幻のことをエゼキエルが見させられた記事がある。あれはイスラエルの復活のことですけれども。こういう驚くべきことがあった。

●キリストの甦りは極めて当然なこと

即ち、復活というのは実は、本来持っているところの、いただいているところの神さまの霊的な生命――霊生です――霊生があれば、人間は決して死なない。キリストというのは霊的な人物ですから、肉を持っていなくても。

「我を信する者は死すとも死なず。死んでも死なないんだぞ」

とキリストが言われたのは、本当にキリストの霊生は聖霊によって受けとる。だから、キリストから来る霊が本当の聖霊なんです。我々は本当に聖霊をうちに宿せば、死んでも死なない。お葬式なんていつでも、湿っぽくやる必要はないので、

「ハレルヤ、アーメン！」

でいい。ブラウニングが、

「私が死んだら歓呼してくれ。そして、勇ましく進んで行け」

と、素晴らしい辞世を歌っています。

キリストの甦りは極めて当然なことなので、どんな事実があったかと、昔から学者がいろんなことを言うが、そんなことは一つも要らん。もう当然な話なんだ。十字架の大業を、贖罪の大業を終われれば、キリストはもう甦らざるを得ない。これほどハッキリしたことは



ない。もし、それがなければ、世界は本当に闇である。神さまの創造は完全に失敗である。ところが、神さまの創造は完成にむかつて素晴らしい勢いをもって進んでいる。それを混沌とさせているのは人間の罪だけの話だ。だから、

「立ち帰れ、立ち帰れ」

と言っておられる。いかなる時も遅いことはない。死ぬ瞬間に、一方の盗賊はキリストに立ち帰った。

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と。彼はパラダイスにいきなり甦らせられてしまった。あれもそうだよ、パラダイスに甦らせられてしまった。

●聖霊は来ざるを得ない

エリシャのこの記事をみて、私は驚き喜んだ。こういう素晴らしいことがあったかと。白骨がそいつに触れたら、死人が甦ったなんて。普通だったら、笑うでしょうね。普通の人はとても信じない。こういう事実には、私はもうハッキリ平伏します。もともと我々は永遠の生命の質を持って生まれている。ただ霊魂が不滅なんていうことを言っているのではない。生命そのものが滅びない。この神との間が、キリストを通して連なりがなくなったら、これは危ない。地獄にいく。サタンに。神の愛というのは――サタンに取られたら大変だということで、「エールカンナー」「妬みの神」という――サタンに取られることを妬むほどに愛したもう神ということだからね。

キリストはもちろん、十字架を通って我々を贖罪して、自我から解放してください。これがまた、言葉ではない。事実だから。この事実がもう、「受けとるか、受けとらないか」であって、「分かるか、分からないか」ではない。「信ずるか」でもない。「受けとるか」なんです。

「その現実を身体で受けとるか」

ということ。私は「信ずる」なんていう言葉よりも、「体受」と言いたい。

「贖罪という事実を全存在で受けとりなさい。もう、過去・現在・未来の人間小池という罪びとは全部贖いとられているから、問題はない。相対的なことがどうであらうと、そんなことはどうでもいい。その奥の世界は、お前は贖われている」

と。そこを本当に受けとったら、聖霊は来ざるを得ない。グーツともの凄い力で。

「聖霊とは何ですか？」

もヘツタクレもありはしない。本当に十字架を受けとってごらん。もう御霊に圧倒されるから。

「わが霊を受けよ」

と。永遠の生がやってくるから。もう死んでも死なないんです、この霊生は。



私はほとんどこの三日間は食べてない。けれども、気持ちはちつとも衰えない。霊生というのは、神さまの生命というのはそんな素晴らしいものだ。甦りの生命は、キリストが

「私は絶対に死なない」

と言われた。

ただ、贖罪の死を、イザヤ書53章を受けとって、地上ではイザヤ書35章を展開していたキリストである。天国を現じつつ、病める者を癒し、苦しめる者に福音を宣べ伝え、魂を喜ばせ、死人を甦えらせ、らい病人を清め、天界を、イザヤ書35章を完全に地上で現象しておられた。やがて来る新天新地はこれよりもっと素晴らしいんだという、新天新地の徴だからね、あのキリストの地上のご生涯は。「聖書研究」なんて要らんですよ。いいですか。本当に身体で読んでください。そうしたら、本当の権威がくるから。もう聖書が楽しくてしょうがない。

「聖書は文字ではなかった。ナザレのイエスに負けた」

と、ナポレオンが最後に告白したでしょ。即ち、35章を展開した。それはイザヤ書53章の贖罪を十字架でやったら、35章の聖霊の現実を展開した。だから、53と35とはおもしろい数だなと思った。イザヤ書は特にキリストが愛読された。

●召団讃歌「復活の力」

それで、私はこないだから楽しくなっちゃったから、4月12日の夜から13日の明け方にかけて、27節にわたる「復活の力」という讃美歌をつくった。それを紹介します。

召団讃歌A54「復活の力」(1987年4月12日作 讃美歌384「我こそ十字架の」歌調)

- | | | |
|---|-----------|----------------------|
| 1 | エノクはメトセラ | 生みしのちに |
| | 三百年間 | 神と共に歩む |
| 2 | エノクはみ神に | 伴 ^つ れられたり |
| | 死を見ずこの世に | 居らずなれり |
| 3 | エリヤは死にたる | 子に三つたび |
| | おのが身合はせて | よみがへらす |
| 4 | エリヤはバアルの | 預言者らと |
| | 神の火求めて | 祈り勝てり |
| 5 | エリヤは火の人 | ヨルダンにて |
| | 火車火の馬 | 現はれたり |
| 6 | エリヤは炎の | 風に乗りて |
| | み空の彼方に | 飛び去りたり |
| 7 | エリヤの分身 | 神の人よ |
| | エリシャは死にたる | 子を憐れむ |



8 身を子に合はする

子は甦へりぬ
あなうれしや

9 エリシャは死にたり

エリシャのむくろは
白き骨よ

10 エリシャの墓場に

投げ入れられたり
他人の屍

11 エリシャの白骨

触るるや屍を
その屍に
甦へらす！

12 噫！ 神の人は

生命の霊骨
死にて死なず
霊すしきかな！

13 エホバに呼ばれて

霊にて枯骨の
エゼキエルは
谷を見たり

14 枯骨に預言す

骨肉生じて
見よ枯骨に
よみがへりぬ

15 ヤイロの娘が

ヤイロはイエスに
今はの際
按手を求む

16 イエスは途にて

病みたる女を
癒し給ふ
十二年も

17 ヤイロの娘は

人々泣きおる
すでに死せり
希望絶えて

18 されどもイエスは

憐み叫べり
娘を見て
「タリタ・クミ」と

19 「乙女よ起きよ！」の

甦へりたるぞ
此のみ声に
あなうれしや

20 ナインの寡婦の

その死出の途に
独子死す
イエス出遭ふ

21 イエスは憐み

み手をば柩に
「泣くな母よ」
按き給へり

えつ、葬式の行列だぜ。その柩に置いたんだ。そうしたら、どうですか。

22 「若者起きよ！」と

若者直ちに
主は叫べり
甦へりぬ

柩の中から動きだした。だから、簡単に火葬にできないね（笑）。私も起き上がってくるか

もしれない。

23 マルタとマリヤの

ラザロ死せり



24 イエスも泣きけり 情け深く
死の後三日も 経にしラザロ

25 「ラザロよ出で来よ！」 主は叫べり
言下にラザロは 出で来れり

みんな、キリストは叫んでいるんです。いい加減な声ではないですよ、これ。

何たる蘇生ぞ 主の御力！

26 主イエスはゴルゴタで 十字架にて

雄叫び給へば 幕は裂けぬ

27 み声に応へて 霊震あり

聖徒の死屍 甦へりぬ

28 岩なるみ墓の 主の軀は

三日目の晨に 甦へりぬ

29 主イエスの聖言 「我は生命

復活なるぞ」 ハレルヤ アーメン

30 エン・クリストにて 死を乗り越えん

十字架・聖霊 めぐみ尽きず

●御霊なんじらの中に宿り給うがゆえに

そういう讃美歌です。ヤイロの娘とか、ナインの寡婦の子とか、ラザロのことはみな著作集第一巻に詳しく書いてありますから、どうぞ、また読み返してください。今日は、そのところのお話は略しましたけれども。特に今日は、旧約の方に重点を置いてお話したわけです。しかし、このキリスト以前に既にそれだけの驚くべきことが起きているので、いわんや我々がキリストに在ってこの生命を受けとったならば、これは本当に死んでも死なない。もう、死というものは、我々にとっては乗り越えられた事実としていよいよ受けとつていきたいと、こう思うわけです。

そうすると、もう毎日が本当にはりが出てくる。まあ、いろいろ人間の様子には、調子が変わるかったりいろんなことがありますよ。心の調子だの、あるいは身体の調子だの。しかし、いつもこのキリストの生命の中に、

「我は生命なり、復活なり」

という、この中に自分を本当に投げ入れて、そして、もうそのこと自身がすぐに祈りであり、すぐに受けとると、現実であるということを我々は体験し、体現していかなかったら、つまんないです。それをまた今度は、人に分かつたざるをえない。それが本当の伝道です。誰でもがそのような伝道をせざるを得なくなる。

パウロがロマ書8章で、



「⁹然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。¹⁰若し^もキリスト汝らに在ま^{いま}さば^{からだ}体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。¹¹若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき^{からだ}体をも活かし給わん。」(ロマ8:9～11)

という。パウロのこの言葉は決定的な言葉です。特にこのロマ書8章11節は今日の新約の大事な言葉として受けとってください。

「若し^もイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、

「若し」ではない、これは。

「御霊が我々のうちに宿っていらつしやっているから」と、現実を読みみたいです。

「御霊が我々のうちに宿り給うがゆえに」

と。

キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたも

う御霊によりて汝らの死ぬべき^{からだ}体をも活かし給わん。」

これはもう死を乗り越えた。さすがはパウロですね。だから、

「この甦りがなかったら、我々の信仰は空しい」

と、コリント前書15章でさんさんパウロが言っているとおりです。

●熾んなる霊の生命の顕現

まあ、福音は盛んなるものです。絶対にへこたれてはいかん。いろんなことに遭えば遭うほど、逆に聖霊が力を働かせます。逆比例する。あまり順風だと、聖霊をお留守にしてしまつてとんでもない。いろんなことにでつくわせば、行き詰まらないですよ、絶対に。逆に力が来るんだから、ありがたいではないですか。こんなことは他にありません。それが本当のキリスト者だという。

だから、私は「新宗教改革」と言わざるを得ない。何も私は自分で新宗教改革をするなんて言っているのではない。聖書が私たちにそう呼びかけているんだから。

「もう、マルチン・ルターだとか、内村鑑三だとかしよつちゅう言っているな。我々

一人びとりが進んで行け。キリスト、直結で行け」

と、こういうわけです。

3月になると、「内村鑑三記念講演会」をしよつちゅうやっているわ。なにもけなすわけではない。私は内村先生を内村先生としては尊敬している。けれども、今度の第九巻にも「噫、



内村鑑三」という文章がある。

「先生は素晴らしくなされた。しかし、一点惜しかった」

と書いてある。これは聖霊のことです。先生には聖霊の火花は散っているんだけど、何といっても使徒的な次元からはズレた。

我々は、皆さんはお一人ひとり、この使徒たちの次元、預言書たちの次元に誰でもが入れる。無条件に。一つも条件はいらん。キリストの復活は熾^{さか}んなる霊生の顕現であって、いわゆる復活ではない。熾^{さか}んなる霊の生命の顕現、顕れである。だから、墓の中から甦^{よみがえ}ったら、岩盤がひっくり返って、ローマの兵士があわてて逃げてしまった。

神を一切とする人は、己の自由に死ぬ人は本当の自由をもっている。今は世の中で、「自由、自由」なんて言っているが、何が自由かと言いたくなる。いろいろ癪^{しやく}にさわるのがたくさんあるけれども、いいよ、そんなことはどうだって。こっちは本当に勝っているんだから。皆さん、いろんなことがあるでしょう、今の世の中には。構やしないよ、そんなものは。

著作集の第九卷(『感想と紀行』)はこの9月に出版しますが、九巻もある程度おもしろいけれども、第十巻は大変なのができますから。第一巻(『無者キリスト』)と第三巻(『無の神学』)と第十巻(『聖書は大ドラマである』)が、これが始と中と終というわけです。特に第十巻は総合的です。これは今度はみな書き下ろしですから。もう十巻で私は明け暮れている。聖書の365か所を選んで――旧約も新約も全部自分の訳です――靈感でもって書いてますから。しかも、これを読めば、聖書を知らない人も聖書の神髄が分かる。だから、これはどうしても普及版でもって日本全国に読者を持ちたいと思うから、どこか大きな出版会社から出したいと思う。もちろん、第十巻としては出します。またしかし、私の文章は漢字が多いので困るけれども。漢字を粗末にしてはダメだ。よくふりがなをしておきますから。漢字は世界最高の文字だよ。感じがいいんだ、大変(笑)。

楽しかったね、この復活節は。そういうわけで、あなた方は大丈夫だよ、ひとつも心配はいらん。今日、新しくいらっしゃった方も非常に素晴らしい集会にお出になってよかった。やっぱり来るものだ。あと話し足りないのは、夕の祈禱会のとくにやりますから。

